

合わせ鏡

立原正秋

合
わ
せ
鏡

立
原
正
秋

光
風
社
出
版

合わせ鏡

定価 1200円

昭和55年10月10日 発行

書籍コード 0093
056701
2265

著 者 立原正秋

発行者 深見兵吉

本文印刷 八光印刷
カバー印刷 大平舎美術印刷
製本 今泉誠文社

発行所 光風社出版

〒112 東京都文京区関口1-32-4

電話(03)204-2441 振替東京8-12913

落丁・乱丁などの不良本はお取り替えいたします

作品集
合わせ鏡

目次

合
わ
せ
鏡

五

刃
物

七

赤
煉
瓦
の
家

一
五

競
馬

一
〇
七

装
幀
司
修

合
わ
せ
鏡

南風ホテルの前で綾子と別れたとき、知也は、綾子の熱っぽいまなざしに女を見た。ああ、俺は、女のこんな目に何度か出逢っているが。……はじめて男を識った女の目は可憐であつたが、綾子の目はそうではなかつた。はじめて男を識った綾子があんな目を俺に向けた、あれはなんだろう？

「しかし、所詮はつまらんことだ」

知也は、藤沢駅にむかう車の窓から、移り行く七里ヶ浜の海岸線を眺め、だるそうに呟いた。

「なにがつまらないの」

藤子がきいた。

「いや、こつちのことだ」

「きれいな娘さんじゃないの。なにか暗い感じがしたけど、男を惹きつける目をしてたわ」

知也はそれには答えず、ハンドルを握っている藤子の手を見ていた。この女ともいいかげんところで手を切らねば。冬からそんなことを考えながら、いまだに切れずにいたが、鎌倉から去るところで、なんとか別れられるかも知れなかつた。

「あなた、いつあの娘に手をつけたの？」

「知っていたのか」

「そりゃ判るわ」

「出戻り女というのは目がたしかなんだな」

「あの娘の目を見れば判るわ。でも、まあ、いいわ。一週間したら藤枝に行くわ。でも、藤枝市長楽寺とだけじゃ判らないわ。番地があるでしょうに」

「番地はあるだろうが、知らないんだ。小川のところには、長楽寺と書いてただけでいつも手紙は届いている」

「無責任な言いかたね」

「ほんとに来るつもりかい？」

「行くわよ」

「なにしに来るんだ？ 俺と寝るためにか？ それなら東京で適当な奴をつかまえばよさそうなものだが」

「そんなに器用に感情の切りかえが出来ると思っているの？ あたしを馬鹿にしているのね。長楽寺というのは町名なの？」

「そうらしい」

「らしい、だなんて、あなた、行ったことがあるでしょうに」

「二度しか行っていないよ」

「今夜はどうするの。やはり箱根には行かないの？」

「だめだ、明日はばあやがくるから。はじめての家に主人がいらないなんて、よくないよ。ばあやも、独りで切りもりしているから、なにかとたいへんなんだ」

「あのばあや、変に色っぽいわ。……じゃあ、一週間すぎたら行くわ」

知也は、片瀬をすぎるあたりで目を閉じ、俺は、この女に藤枝くんたりまで追いかけられるいわれはない、と思った。家を売って鎌倉から去る気になったのは、生活を建てなおしたい、という思いが心の裡のどこかに潜んでいたからである。越す先はどこでもよかった。彼の裡に棲みついている鎌倉は、淀み果てて死んだ街であった。酒を飲み女と遊びくらしているうちに、いつしか三十歳を過ぎていた。鎌倉の街は、どこを歩いても、過去の無頼な生活の残骸が目につき、ああ、いやな街だ、と思うときがあった。刺戟をもとめ、そこに浸っているうちはよかったが、麻痺してくるとだんだん倦怠が身についてきて、辛い日が続いた。倦怠に耐えるのはなにより辛かった。辛さを通りこすと怖さを感じた。その怖さは、俺はこうしているうちに、しまいには自殺するのではないか、という思いに繋がっていた。

しかし、綾子に手をつけたのは間ちがいであった、と知也はにがい思いに落ちて行った。南風ホテルに別れを言いに来た綾子から、

「わたし、あなたを愛してしまつたんです。目をあけてこちらを見てください」

と言われたとき、知也は、危く自分が蘇生できると勘ちがいた。綾子の態度には、凜としたものがあつた。己に克つてきた一人の若い女の激しい情念に直面した彼は、目を閉じたまま、つまらんことだ、と答えながら、自分の裡に絶望を見たが、あのときの絶望は、もしかしたら綾子と俺は兄妹かも知れない、という思いからきていたのではないか。

知也は、藤枝に借りた家を見たわけではない。近くに手頃な空家があつたから借りておいた、との小川の手紙で、それでは越そうか、と決めてしまつたのである。棲む場所が変れば、倦怠から脱出して転身できるだけの強い対象が見つかるだろうか、それは判らなかつた。はつきりしているのは、綾子が藤枝に来るだろう、ということだつた。

「藤枝に行くのは、すこし遅れるかも知からないわ。新しいスーツが出来あがつてからにするわ」
藤子が言つた。

「もっとおそい方がいいよ。なんなら、ずうっと来なくともよい」

「それ、どういう意味？」

「意味なんてないよ。男と女は、いったん出来てしまうと、殆どの場合、徹底的に相手を識りつくそうとするものらしい。おまえさんも御多分にもれず、そんな女になりかかつているらしいな。しかし、俺はもういやだよ。これ以上疲れるのはごめん」

「あたしがいやになってきたの？」

「女という動物がいやになったのさ」

「女がいやになったなんて、そんな見えすいた嘘をいうものではないわ。あなたのような面喰いめんくの色好みが、いまさらそんなことを言っても、誰も信用しやしないわ」

知也は返事をせず、この女はどの部類に入るだろうか、とかかわりあった女の顔をひとりひとり想いかえしてみた。こんな風に女を識別したことはなかったが、藤子は、有閑無職階級の空虚退屈な生活を送っている女であった。すくなくとも一年ほど前までは、男遊びを消閑の余技に数えていた女であった。

知也は、一度だけ藤子の寝室に泊ったことがある。出戻りでも、野上家では子供は藤子ひとりだったから、勝手気儘な贅沢ぜいたくが許されていた。

寝室には、北側の壁に嵌めこみ鏡があった。そこに、反対側においてある三面鏡が反射し、三面鏡の横の台においてある宝石や真珠の光が氾濫はんらんし、すべすべした贅沢な調度品には香料のにおいが滲みつき、性的遊戯に耽るふけるにはこれ以上の場所はない、そんな部屋であった。

そこに男をひきこみ消閑の余技にしていた頃はよかったが、いつしか盛りを過ぎた自分を意識しはじめ、知也にたいして微妙な変化を見せはじめたのである。

最近はたいがい鎌倉の南風ホテルで一夜をとにしたが、藤子は、骨を灼くや激しい求めかたをし

た後は、乱れ髪のまま死んだように睡った。知也はそんな藤子の寝顔を見おろし、生きながらの死を見た思いをした。俺もこの女と同じだろう、と彼はよく起きぬけに鏡に自分の顔を映してみた。いつも、すっかり皮膚が死に、疲れが溜った顔であった。

しかしまだ充分見られる女であった。三十五歳にしてはしなやかな軀で、硬い太腿と細い脚、くびれた胸に厚みのある腰、丸く突きでたかたちのよい尻、太り肉じしと感ぜられるほどの豊饒な乳房ほうじょうがあり、全体に筋肉質の軀であった。

「あたし、やはり、一週間したら行くわ」

藤沢駅前で車から降りたとき藤子が言った。知也はこのときどうしたわけか、陰翳いんえいの深い綾子の性格を想いかえしていた。

東海道線の下り電車がつくまで間があつたので、知也は藤子をつれて裏通りの喫茶店に行った。小田原まで普通の電車に乗り、そこから準急に乗りかえればよかった。

「あの娘、きつと、藤枝に行くわよ。さつきホテルの前であたしを視つめる目が尋常ではなかったわ」

藤子は、喫茶店に入って席につくなり言った。駐車場からここに歩いてくる道々、ずうっと考えていた、という風な言いかただった。

「なぜそんなに気にするんだね」

「氣になどしていいいわ」

「それなら、あの娘にはかまわない方がいいな」

「そうはいかないわ」

「気の毒な娘なんだ」

「そんなことは問題外よ」

そうかも知れない、年齢や境遇の差などは、女にしてみれば問題外かもしれない、と知也は白いレース越しの窓外を見た。道を隔てたむこう側には、葉の出そろった銀杏並木があり、その向うの右垣には初夏の陽が射していた。

このとき彼は、綾子が来るのを待っている自分の心の裡をみた。やはり不気味だった。血の繋がりを考えると、ひどいいたずらだ、と思わないわけにはいかなかった。しかし、ほんとに綾子と俺は異母兄妹だろうか？　しかし、もう、取りかえしはつかなかった。

二

綾子は、南風ホテルの前で知也と藤子の車を見送ると、苦しみに苛まれはじめた。いままでは、この鎌倉のどこかに知也がいる、という事実^{さいじつ}に安堵していた面があったが、藤枝に去ってしまった、

それも有閑女といっしょにわたしの目の前から去ってしまった、という事実はやはり苦しかった。

綾子は南風ホテルの庭をでると海岸道路に歩いた。そして、そこから、ぎらぎら光っている砂浜を見おろし、やがてその光が自分の内部を照らしてくるのを見たとき、なるべく早く早く藤枝に行こう、と思った。

それから綾子は海岸道路を再び材木座まで歩いた。ばあやから、藤枝の住所をききたためであつた。

ばあやはまだ後かたづけをしていた。

「昨日からやっているの、もうだいたいおしまいです、綾子さん、知也さんにおあいになりましたか？」

ばあやは三人の若い男に休むよう命じると、縁側に腰をおろしながら綾子を見てきた。

「ええ。……野上藤子さんといっしょに車でホテルを出て行かれました」

「いったい、どういうおつもりなんですかね。この家は売ってしまうし、それも綾子さん、早く売するために、時価より三割も安く手放したんですよ」

「それで……ばあやも藤枝に行くの？」

「ええ、参ります。私がいけないことには、なにひとつ出来ない方なんですからね」

「今日これから行くの？」